

られ、洗練された口語が述べられるであろうと感心したことであった。……室内の楽しい物語はつきない。殊に清水さんが人々のために書かれた短冊は、長く今夜のよい思い出となることであろう。」など、いつも雪子夫人は親しみと敬慕の眼差しで見つめていた。

昭和38年12月、信綱の訃報をモスクワで聞いたグルースキナさんは、次の一文を寄せた。

(文化財保護課)

回復出来ない喪失

アンナ・グルースキナ  
清水 水 浪 子

梓弓

注〔あづさゆみ〕

聲爾聞而

〔こえにはききて〕

将言為便

〔いはむすべ〕

世武為便

〔せむすべ〕

不知爾……

〔しらに〕

万葉学は、どうも偉大なる喪失をしたもので御座います。日本文学に関心を持っている人々みなは大きな損害を蒙ったのである。お国ばかりでなく、外国でも有名なすばらしい万葉学者佐佐木信綱先生が、私たちが永久に逝ったことは悲しみの至りで御座います。はじめて先生にお会いしたことが、ごく昔の事になってしまいました。最近までも先生から時々お手紙とか、本とか、御助言をもらいました。先生にとっても有難く思っております。

先生に私を御紹介した方は当時の日本学士院長櫻井錠二

様で御座いました。その時、私は東京帝大で万葉集についての先生の講義をお聴きすることの出来たのを回想すると、深く感謝いたします。国へ帰って万葉集の仕事に従事した時、先生から価値の多い参考書になった労作をいただきましたことを回想すると、お礼の申しようが御座いません。

今、万葉集を全訳して出版準備中で御座いますが、私の露訳万葉集の出版の前におなくなりになったことを非常に残念に思います。毎度、その事を思うと残念でたまらない。親友なる先生の私への御配慮を何時までも忘れられないので御座います。

花がいくら美であっても、落ちる時が来ます。雪がどれほど長く降ってても、消える時になりますけれど、すばらしい万葉学者である。すばらしい人間である。佐佐木先生の明るい記憶と尊敬すべき、感心すべき姿も日本の友人ばかりでなく、外国の友人の心の中にも永久に残るであろう。(原文は旧かなづかい)〔内は編集者注〕

――『心の花』 佐佐木信綱追悼号 昭和39年4月号

あとがき 中村先生との出会い―それは光太夫が取り持つ縁であった。昨夏、先生を若松地区の大黒屋光太夫顕彰会総会に講師としてお招きしたあと、当資料館にご案内した際、たまたま展示中のアンナグルースキナの著書に目を留められたのがきっかけで、以後、ロシア語の文献等の翻訳を含め、数々のご教示、ご指導を仰いでいる。(辻)

<p>佐佐木信綱資料館だより</p> <p>第六号</p>	
目次	ロシアの万葉集
佐佐木雪子夫人と清水浪子さん	注 中村 喜和
回復出来ない喪失	正 中村 喜和
信綱一首(一六)	村田 邦夫
アンナ・グルースキナ	・鈴鹿市教育委員会文化財保護課
(一五・〇五九三・八二・一〇〇〇)	千五二三 鈴鹿市神戸九一―一五
佐佐木信綱資料館	(一五・〇五九三・七四・三二四〇)
千五二三 鈴鹿市石巻町一七〇七	

ロシアの万葉集

―アンナ・グルースキナさんのこと

中村 喜和

モスクワ大学に留学していたとき、ある友人の紹介でアンナ・グルースキナさんにお目にかかった。一九七一年の春のことである。私がロシアの古典を勉強しているというので、日本の古典の代表的な研究家に引き合わされたのである。初対面の書生に、アンナさんは刊行されたばかりの袖珍版『日本の五行詩』をくださった。五行詩とは短歌のことで、訳者はむろんアンナさん自身である。

そのときの私よりもっと若いころ、アンナさんは日本に留学して信綱大人の講義を聞くという幸運に恵まれた。そればかりでなく、西片町の佐佐木家をしばしば訪れたことは雪子夫人の文章によって知られる。たとえば次のような一文。「うつくしい花束を手にした清水浪子さんが見えた。……水たぎの夕げがすんで後、……みななのいろいろの余興が

始まる。清水夫人は自国の歌をうたはれた。露国の民謡とて、もとより意味はわからぬが、声はまことにうつくしかった。」(『心の花』昭和三年七月号)

清水浪子とはアンナ・グルースキナさんのこと。このころ日本語を学ぶロシアの女子学生たちのあいだで日本名をもつことがはやっていたのである。

アンナさんの写真が残っている。ある歌集の出版記念会の席と、佐佐木邸でうつされた小人数の写真である。どちらの場合も、アンナさんは信綱夫妻の最も近くにいて、異国からのまろうどとして、あたたかく迎えられていたことが歴然としている。



前列中央、グルースキナ、その右  
雪子、後列中央、信綱

帰国にさいしてアンナさんは恩師に感謝して歌一首をよんだ。短冊に墨で書いていったのである。平均的な日本人よりはるかに達者な筆づかいで。



旅人は君がしるべにみちびかれ  
やまとの歌のこころしりえつ

浪子



グルースキナ自筆の短冊

アンナさんの留学はみごと  
に実を結んだ。私がお会いし  
た年からその翌年にかけて、  
アンナさんの手になる『万葉  
集』の完全なロシア語訳が三  
冊に分けて刊行されたのであ  
る。巻一から巻二十まで、詞書も長歌も短歌も全部訳され  
た。各巻の巻末にはそれぞれの歌について周到な注釈がつ  
けられた。三つの巻を合計すると一八四八ページになる大  
事業だった。今思いかえしてみれば、あのころのアンナさ  
んは最後の巻の校正に忙殺されていたはずである。  
アンナさんの仕事にとって大きな助けとなったのは『万  
葉辞典』だった。この書物を贈られたことに對する信綱あ  
ての礼状がのこっている。ロシア語版『万葉集』序文の中  
でアンナさんは次のように書いている。

最近において『万葉集』最高の權威と見なされているのは帝室学士院  
で元東京帝国大学教授の佐佐木信綱である。彼はさまざまな角度からこ  
の作品を扱ったおびただしい著述を行っている。彼の監修のもと、さら  
に四人の学者（武田祐吉、久松潜一その他）の参加を得て一九二四年に  
は基礎的な本文研究である二五巻からなる『校本万葉集』が刊行された。  
短い異説を付し、テキストを現代日本語風に書き改めた信綱の手にな  
る普及版の詞華集『新訓万葉集』は大いに人気を博し、一九五四年に再  
刊された。万葉集全体に注釈をほどこした校訂本、さらには名歌を集め

た数多くの選集や研究論文もある。  
信綱の仕事の総仕上げともいえるべきものが『万葉辞典』であり、  
これはこの作品にまつわるありとあらゆる事柄をとりあげ、詳細きわま  
る書誌学的な便覧をつけたエンサイクロペディアである。

アンナさんの『万葉集』はよほど評判が良かったらしく、  
一九八七年になって選集が刊行される。今度は柿本人麿を  
はじめ、作者別に名歌を並べてハンディな体裁となった。  
ちなみに発行部数は全三巻のときが各巻七〇〇〇部だった  
が、選集では三万部となった。これだけあれば、ロシア国  
内の津々浦々の図書館に行きわたったことであろう。  
実を言えば、私にとって信綱はすでに歴史上の人物であっ  
て、まだ若やいでいる目の前のアンナさんが信綱その人と  
師弟の糸でむすばれていると想像することは不可能だった。  
アンナさんがしきりに口にする「佐佐木先生」はのちの世  
代の歌人にちがいないと思ひこんでいたものである。

つい最近になって私の蒙をひらいてくださったのは佐佐  
木信綱資料館の辻正さんで、日本におけるアンナさんにか  
かわる資料はすべて辻さんに教えていただいたのである。  
これも辻さんから示されたのだが、おそらく留学中アンナ  
さんが信綱に贈ったロシア語の詩二篇を翻訳しておこう。  
カッコの中は私が勝手に万葉ぶりに意識したのである。

いとしい人がしている指輪のように、  
水色の錦の上の真珠の首飾りのように、

佐佐木雪子夫人と清水浪子さん

辻 正

アンナ・グルースキナ・シュワルツマン（日本名、清水  
浪子）夫人は、ロシア学士院の助手で、以前から日本文化  
を研究、古今集抄訳も出版していたほどの日本通。昭和三  
年三月ごろ、日本の古典を研究したいと一年間の予定で来  
日、帝国学士院長桜井鏡二氏（◎佐佐木由幾先生外祖父）  
の紹介で信綱を知り、以後しばしば佐佐木家を訪れ、雪子  
夫人とは家族同様の付き合いがあったようである。

信綱、雪子共著『筆のまにまに』に登場する清水浪子さ  
んは……「いつもの巧みな日本語で、その後、京都・大阪・  
奈良に旅しまして、あこがれておりましたお国の古代の芸  
術を心ゆくまで見てまわりました。これからは、万葉の抄  
訳や、いろいろの研究を少しでもままとめたい……と。」ま  
た、送別会当日のようすを……「清水夫人が古今集の離別  
の歌を引いての話は、どうしてこれほど日本語が上手にな

アンナさんはまだモスクワにご健在の由である。その巨  
大な仕事が尊敬をあつめているだけでなく、おだやかな人  
柄ですべての日本学者にしたわれているという。

（一橋大学教授）

わが国ではだれしもが詩人にはなれない、  
だれしもが詩神（ムーザ）に愛されるわけではない。  
だがひとたびこの国に来て  
あなたに逢えば、たちまち詩人になれよう。  
（日の本は歌びとの国わが君は  
歌びとの神ムーザのごとし）

まぶしいばかりに美しい――  
あなたの幸多き里は。  
この里をあなたは古里と呼んでいる。  
（玉ひかる真珠のごとくわが君の  
古里こそはあやにうるわし）

信綱一首・6

やまとをば何にたとへむ はなやかに  
さまざまにほふ春の花束

浪子

創刊号以来の型を破り、アンナ・グルースキナ特集に因んで自  
筆短冊（写真参照）を紹介する。彼女が帰露に当って東京駅を発  
つ夜、信綱夫人雪子は昼間の他の祝宴で引出物に出た花籠をその  
場でほぐし、花束にして、ホームに駆けつけた。この友情に感じ  
た彼女の一首。得意とした古今調が句やかである。（村田邦夫）